

第4回入学式創立者講演「創造的生命の開花を」を読む

水 元 昇

1. はじめに

連続講座ですので、今までの2回に関連してこの講演を進めていきたいと思います。「建学の精神を学ぶ」というのがこの3回の講演の基本的なテーマであります。したがって「創造的生命の開花を」という講演が建学の精神といかなる関係にあるのかという点が今回も要求されていると思います。この講演は別しては私たち4期生を中心とした草創の創大生に対して、そして総じては未来に続く全創大生・短大生そして、大学に関わるすべての方々々に与えられたものであります。私も4期生の一人としてまさに自分たちの使命として、直接お話を伺った一人として在学中から今日まで、それこそ何回となく数えられないぐらい読んできました。自分が苦しいとき、そして行き詰ったとき、また、考えなければならぬ課題があったときなど、数百回になるでしょうか、読んできました。本当にこの講演こそ私にとっても座右の銘ともいえるものです。また、多くの先輩・友人・後輩たちも同じように自身の原点との思いで読んできたものだと思います。

私はこの講演を読む視点として自分なりに以下の5点に整理をしてみました。もちろん、すべてが金の言葉であり、宝の山ですが、その中で特に中心となる2点をあげるとするならば、この講演でもっとも強調されたことは、そのうちの(1)と(5)の2つの視点からの創立者のお話であると思います。

(1) 使命論——創大生の生涯にわたる使命とは何か——創立者の“遺言”

創立者が私たちに「遺言」とまで言われたことは何か、そしてそれは私たちだけでなく未来に続く創大生一人一人に託されたかと理解しています。後で詳しく述べたいと思います。

(2) 大学論——大学とは何か。とくに私立大学の特質とは何かという点に言及されていません。

(3) 学生論——理想の学生像とは何か。学生の姿勢という視点です。

(4) 教育論——教員と学生のあり方とは何か、どうあるべきかという点です。

以上(2)(3)(4)の3つの視点は、第3回入学式での「創造的人間たれ」と「スコラ哲学と現代文明」ですでに言及をされた点を完成年度の新入生に強く再確認をされるとともに、さらに新たな視点を加えて述べられたと私は理解しています。とくに大学論は杉山さんが1回目の講演でわかりやすく述べられたように「創造的人間たれ」の中でも「大学と文化との関係を世界史の中に探る」というテーマで言及し、さらに森さんが2回目「スコラ哲学と現代文明」のなかで数百年にわたる雄大な歴史の中での大学が果たした役割を、壮大な歴史観の上で語られていると言及されたように詳しく展開されています。

(5) 人間論から生命論へ——創造的人間の源泉とは何か

そして、この講演の極めつけの内容は、まさに「創造的生命の開花を」とのテーマにあるように生命論からの展開なのであります。杉山さんが少し「創造的人間たれ」の中で「自由と自

立」「自我の拡大」さらに「歓喜」という表現で触れたように、「創造的人間たれ」との未来永遠の指針を第3回の入学式で話された創立者が、その人間になるための方途、さらにはその源泉とは何かを、生命論の上から仏法的な言葉を使わず、創立者ご自身の命の実感から発せられたと捉えたいのであります。まさに創価の思想のよってたつ基盤は、そこにしかないということ宣言されたのであります。結論としての「一人の人間における人間革命」というテーマを具体的な言葉として、また私たちの永遠のかつ絶え間ない挑戦目標として宣言をされたと思えます。その意味で5番目を「人間論から生命論へ—創造的人間の源泉とは何か—」という結論として整理してみました。

それから、「建学の精神を学ぶ」というのがこの3回の講演の基本的なテーマであります。したがって「創造的生命的開花を」という講演が建学の精神といかなる関係にあるのかという点が今回も要求されていると思います。そこで、建学の理念との関係で言うとどちらかというところの講演では「人間教育の最高学府たれ」という視点が強く表れていると理解しています。杉山さんも森さんもこれはそのように語られていました。また当然「人類の平和を守るフットレスたれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」という視点も中に織り込まれていますが、中心は「人間教育の最高学府たれ」という点にあることも合わせて主張しておきたいと思えます。

2. 講演の時代背景と意義

講演の背景として当時の時代状況を含め、まずお話をしてみたいと思えます。時代背景として第4回入学式が行われた時は①創価大学にとって初めて1年生から4年生までが揃ったいわば大学としての完成年度であったということがあげられます。②創立者を求めて全国から集った1、2、3期の先輩方が学生こそ創立者であり創造者として大学を建設するといういわば「創立者としての学生」に目覚め、クラブ活動や自治会活動など様々な制度が一応形になってきたころでもありました。③創立者は公式に來学された第3回入学式での「創造的人間たれ」の講演を含め、それまで大学に14回来学されています（資料1参照）。今回この資料は実は創立者のこの時期の行動と大学への來学、そして世界への行動を調べて作成しました。④トインビー対談に始まり、海外の大学へ創価大学の創立者として來訪され、世界の識者と教育の視点で語らるのを始められた時期でもありました（資料1参照）。この③と④については後でまた述べます。

開学したての創価大学の当時の状況について1つのエピソードを紹介します。私は東京創価学園の高校の4期生でもあります。私の学園時代は、当時の雰囲気として皆が無名の創価大学ではなく国立など一流大学に行って創価の実力を示したい、それこそが学園生の使命だという雰囲気が私たちの周りにはたくさんありました。それは先輩たちが外部の有名大学に行ってがんばっているように見え、当時無名の創価大学はわかりにくかった点もありました。私自身もそう考えていた時期もあります。有名大学に合格することが1つの実力の証明であり目標でもありました。しかし、私たちの高校3年生の栄光祭に創立者が見えて自らの心情を強く語られました。それは噴水のたとえを引かれ、「たとえば噴水のようにいろんなところへ行く人がいてもいい。しかし、本流は創価大学に行ってほしい。私は創価大学を世界一の大学にしたいんだ」（趣旨）というお話でした。さらに厳しくも「創価大学に来るからには、命を賭ける覚悟できなさい」（同）、また私たちの将来への不安を切ってくださいるかのように「創価大学へ入学する学生は私を信じて来るんだ。就職のことなんか心配することはない。創大へ入学し、後輩のために道なき道を切り開き、後輩のための捨石となっていく。そして、将来、たとえどんな仕事をして人生を送ってもその人の人生こそ本当に偉大なのです」（同）と創価大学への思いを語ら

れました。

それを聞いて多くのメンバーが「そうだ自分のためではない、創価大学を世界一の大学にするための役に立つんだ。後輩の道を切り開くんだ。それが私たちの使命だ」との思いで進学してきました。学園にとってもはじめての推薦試験の1期生でした。後輩の道を開き、創価大学を世界一の大学にするためにはなにができるだろうかと、今考えると学生の立場で大それたことを真剣に考えていました。そういう雰囲気学園にあったのです。たとえば残りの高校時代で大学の勉強へ自主的に挑戦を始めたり、私も経済学の本を古本屋で買ってきてわかりもしないのに勉強したりした覚えがあります。また、当時1期生の前田清隆さんが公認会計士に3年生で合格されたという話を聞いて、「よし教養の1次試験を今、独力で突破しておけば全国最年少の記録も作れる」などと数名のメンバーと高校生で1次試験に挑戦したりしました（残念ながら卒業式の日程の変更で受験できませんでした）。そして学園生活をやりきって晴れて大学に入学してきました。

そういう雰囲気で進学してきた私たちでしたので、この講演を入学してすぐに聴いたときの衝撃は今思い出しても身が震えるようでした。とくに「遺言」とまでいわれた言葉には100万ボルトの電流のような衝撃が命に走りました。その前年の入学式で創立者は私の死後30年をといわれました。また滝山祭では数百年という壮大な歴史の転換への挑戦として大学の存在意義を語られました。その上での「遺言」という言葉には創立者のほとばしるような一念の強さと深さがまさに命に突き刺さるような思いでした。その思いを受けてまさに「我々こそ大学建設の主体者だ」との自覚は私たちの五体に満ち溢れ、皆で語り合いながら今日まで必死になって大学建設の作業に取り組んできました。そしてこの作業には、生涯に渡って取り組んでいくことになるのかもしれない。

この講演は1年生から4年生まで全学年がそろい、形の上での大学の完成というときに、創価大学が目指す永遠の指針を、創立者が未来に続く全創大生、そしてすべての大学関係者さらには大学を暖かく見守っていただいている方々に命がけで示されたということがもっとも重要な点であると思います。その後いつからか学生の間で「草創三部作」と呼ばれるようになってまさにその意義がとどめられてきましたが、その呼び名のとおり、これから1000年2000年と続いていく創価の運動の精神的・理論的機軸となるであろう創価大学の根本的な理念と理想が貫かれています。そして、結論として創価の運動の機軸には創造的生命の開花—ヒューマン・レボリューションこそがすべての源泉であることを主張されたものであります。壮大な歴史の流れの中で、創価の運動が将来必ず世界から評価され、(創立者一人の努力ですでに現在評価されつつあります) 一大世界平和運動の原点は一人の人間における人間革命運動—個人を最高に輝かせ、周りにもその価値を最高に高めていく運動から始まった、また今後もそこにしか基軸はないということが大学の建学の精神の上でも永遠の目標として宣言されたことに大いなる意義があると捉えています。

3. 使命論——創大生の生涯にわたる使命とは何か——創立者の“遺言”

それでは、本論に入りたいと思います。この講演を読む視点として先ほど整理して挙げた5点を中心にお話しさせていただきます。まず第1点目として「使命論」であります。講演には次のようにあります。「私が、世界の人々のなかを駆けめぐるその胸中には、常に大切な、そして心より信頼する諸君の存在があったことを知っていただきたいのであります(大拍手)。どうか諸君は、私の今打っている“点”と“点”を“線”で結び、更にそれを壮大な立体とした世

第4回入学式創立者講演「創造的生命的開花を」を読む

界の平和像をつくりあげていってほしいのであります。これは、私の諸君に対する遺言と申して頂きたい。お願いします（大拍手）」(p.89)。

点とは何か。この前の部分には海外へ行かれたことを報告される内容があります。お手元の資料を見てください（資料1参照）。

創立者の主な行動 大学・海外のみ抽出（開学以前の海外訪問から4期生1年次まで） 資料1

	年	日付	大学と創立者	創立者来学	日付	海外	大学訪問	備考
開学以前	35				10.2-25	アメリカ		
	36				1.28-2.14	インド アジア		
					10.4-23	ヨーロッパ9カ国		
	37				1.29-2.12	中近東		
	38				1.8-27	世界1周ハワイ・アメリカ・パリ・ヨーロッパ・レバノン・インド・香港など		
	39				5.12-24	オーストラリア・インド・セイロン		
					10.2-19	ヨーロッパ		
	40				8.14-25	アメリカ		
					10.19-31	ヨーロッパ		
	41				1.13-17	ハワイ		
				3.6-23	北・南アメリカ(ブラジル・ペルー)			
				5.13-29	ヨーロッパ・アメリカ			
1年目	1971(S46)	4.2	創価大学開学					
		4.10	第1回入学式					
		11.21-23	第1回創大祭	1				
	1972(S47)	1.23	第2期工事視察	2				
2年目		4.10	第2回入学式					
		4.19	第2期工事視察	1	5.5	トインビー博士と対談	ケンブリッジ・オックスフォード大学	
		7.6-7	第1回滝山祭	2				
		11.24-26	第2回創大祭	3	1.14	関西女子学園落成式		
3年目	1973(S48)	4.9	第3回入学式	1	4.11	女子学園入学式		
		6.13	ヨーロッパ帰朝報告	2	5.15	トインビー博士と対談	パリ大学・サセックス大学	
		6.14	授業参観	2				
		7.12	豊田寮・加住寮訪問	3				
		7.13-15	第2回滝山祭	3	8.11-20	ハワイ		
		8.25-26	第1回夏季大学講座	4				
		9.29	第2回体育祭	5				
		10.1	授業参観	5				
		10.26-28	第3回創大祭	6				
					1.26-31	香港	香港大学・中文大学	6日間
4年目					3.7-4.13	南北アメリカ	カリフォルニア大学・ニューオリンズ大学	38日間
					3.19	パナマ	国立パナマ大学	
	1974(S49)	4.18	第4回入学式	1	3.26	ペルー	サンマルコス大学	
		5.3	開園式	2	4.1	カリフォルニア	UCLA講演「21世紀への視言」	
		6.22-29	第3回滝山祭	3	5.29-6.16	第1次訪中	北京大学	18日間
		8.10、12	みどり寮・朝風寮訪問	4				
		8.22-26	第2回夏季大学講座	4	9.8-18	ソビエト訪問		11日間
		9.20	ソ連帰朝報告	5				
		10.25-27	第4回創大祭	6				
		11.5	モスクワ大学ホフrof総長を歓迎	7				
		11.23	第2期工事視察・加住寮訪問	8	12.2-6	第2次訪中	北京大学	5日間
		12.8	中国帰朝報告	9				
	1995(S50)	3.22	第1回卒業式	10	1.6-28	アメリカ		23日間 (海外へ1年で約100日)

『年譜・池田大作 I』および『創価大学三十年誌(学生編)』より筆者が作成

創立者の海外への旅は昭和35年から始まっています。この講演は、今までの中でも最も長い約1ヶ月以上の旅の直後になります。創価大学開学2年目に世界の知性の一人であるトインビー博士と歴史的な対談をされ、ヨーロッパ・アメリカと、海外の大学へ創価大学の創立者として来訪され、教育の視点で語らいを始められた時期でもありました。教育交流を続けてきた創立者がまず私たちとその溢れる思いを語られたのです。

しかし、この言葉は創立者自身の深い決意でもあったと捉えることができます。その証拠にここを基点として創立者の海外交流はこの思いを実現するためにもものすごい勢いで始まります。創立者自らが私たちの道を開かんと全力投球される姿が私たちの目の前にありました。この講演の前後1年間だけでも実は年間5回、計約100日も海外に行かれています。創立者46歳です。第一次訪中、ソビエト訪問など重要な旅が続きます。激闘です。しかもその間に北海道から九州までくまなく全国を回られ、創価学会の夏期講習会で約1ヶ月も大学にも来られ

ています。私もちょうどそのころの創立者と同じぐらいの年になっていますが、年間5回も100日海外に行くだけでも大変なのに毎日激闘の中で、大学にも10回もこられています。点と点をといわれながら、創立者自身がこの言葉をわが身で体現するかのような戦いの出発としての宣言であったことは、後になってそして今になってわかったことです。まさに創立者の一念の中にこの言葉のとおり命がけで戦われていたと思います。なお、海外の諸大学での創立者の講演の一覧も載せました（資料2参照）。

入学式の直前にUCLAで行われた最初の講演を基点に、その後世界各地で31回を数えます。これらを思い合わせるとき、この「点」といわれた意味は、これまでの点ではなく、ここからどこまでも自分が走りぬいて、私たちへの道を開くとの決意の表れでもあったのです。

次に使命論の1つとして「教育交流から世界の信頼関係の樹立へ」と題してみました。創立者はここで具体的には教育国連、学生自治会会議、世界大学総長会議などをあげられさらに次のように述べられます。

「これらは私一人ではとうていできないし、また、その資格もない。やがての時代、諸君たちがその実現に努力してほしいのであります。ともあれ、世界はますます、この“発想の母胎”である創価大学に、注目してくるでありましょう。創価大学の諸君こそ、それにふさわしい世界的偉材と育っていかねばならない。そして、人間と人間のスクラムによって、脈動しゆく世界交流、信頼関係への樹立へ向かって、大いなる波動を起こしていかねばならぬ、と私は諸君に期待をかけるものであります」（p. 90）。

「今後、いよいよ本格的に世界のさまざまな大学から教授や学生が数多く本大学を訪れるであろうし、諸君にもどンドン行ってもらわねばならなくなる時代がくるかもしれない。忙しくなるとは思います、またそこには、大きな張り合いがあることを、知っていただきたいとします」（p. 89）。と私たちに期待を寄せられます。

まさに30年たって今考えてみると本当にそういう時代となっています。交流大学も86大学を数え、毎日のように創立者を求めて海外からお客様がこられる時代になっています。この3つの課題は今までもまたこれからも一貫して私たちが取り組んでいく課題です。1999年にソウル

創立者の海外での講演 資料2

日付	場所・題記
31 1997. 10. 21	ラジブ・ガンジー現代問題研究所(インド) 「[ニュー・ヒューマニズム]の世紀へ」
30 1996. 6. 25	ハバナ大学(キューバ) 「新世紀へ大いなる精神の架橋を」
29 1996. 6. 13	コロンビア大学(アメリカ) 「[地球市民]教育への一考察」
28 1996. 6. 4	サイモン・ウィーゼンタル・センター(アメリカ) 「牧口常三郎一人道と正義の生涯」
27 1995. 11. 2	トリブバン大学(ネパール) 「人間主義の最高峰を仰ぎて—現代に生きる釈尊」
26 1995. 6. 26	アテネオ・デ・サンタンデル(スペイン) 「[21世紀文明の夜明けを—ファウストの苦悩を超えて」
25 1995. 1. 26	ハワイ・東西センター(アメリカ) 「平和と人間のための安全保障」
24 1994. 6. 1	ボローニャ大学(イタリア) 「レオナルドの眼と人類の融合—国連の未来についての考察」
23 1994. 5. 17	モスクワ大学(ロシア) 「人間—大いなるコスモス」
22 1994. 1. 31	深州大学(中国) 「[人間主義]の限りなき地平」
21 1993. 9. 24	ハーバード大学(アメリカ) 「[21世紀文明と大乗仏教」
20 1993. 2. 12	ブラジル文学アカデミー(ブラジル) 「[人間文明の希望の朝(あした)を」
19 1993. 1. 29	クレアモント・マッケナ大学(アメリカ) 「新しき統合原理を求めて」
18 1992. 10. 14	中国社会科学院(中国) 「[21世紀と東アジア文明」
17 1992. 6. 24	アンカラ大学(トルコ) 「文明の揺籃から新しきシルクロードを」
16 1992. 2. 11	ガンジー記念館(インド) 「不戦世界を目指して—ガンジー主義と現代」
15 1992. 1. 30	香港中文大学(中国) 「[中国的人間主義の伝統」
14 1991. 9. 26	ハーバード大学(アメリカ) 「[ソフト・パワー]の時代と哲学」
13 1991. 4. 21	フィリピン大学(フィリピン) 「平和とビジネス」
12 1991. 1. 30	マカオ東亜大学(中国) 「新しき人類意識を求めて」
11 1990. 5. 28	北京大学(中国) 「[教育の道文化の橋—私の一考察」
10 1990. 3. 1	ペノスアイレス大学(アルゼンチン) 「[融合の地]に響く地球主義の鼓動」
9 1989. 6. 14	フランス学士院(フランス) 「[東西における芸術と精神性」
8 1984. 6. 9	復旦大学(中国) 「[人間こそ歴史創出の主役」
7 1984. 6. 5	北京大学(中国) 「[平和への王道—私の一考察」
6 1983. 6. 7	ブカレスト大学(ルーマニア) 「[文明の十字路に立って」
5 1981. 5. 21	ソフィア大学(ブルガリア) 「[東西融合の緑野を求めて」
4 1981. 3. 5	グアダハラ大学(メキシコ) 「[メキシコの詩心に思うこと」
3 1980. 4. 22	北京大学(中国) 「[新たな民衆像を求めて—中国に関する私の一考察」
2 1975. 5. 27	モスクワ大学(ロシア) 「[東西文化交流の新しい道」
1 1974. 4. 1	カリフォルニア大学ロサンゼルス校(アメリカ) 「[21世紀への提言」

※SOKANETより

で世界NGO大会がありました。そのとき私は在外研究で慶熙大学にいた関係で役員として参加させていただきました。その際に趙永植学園長の尽力で世界大学総長会議が開かれました。創価大学も参加しました。こられた方々は皆、創立者と共通の友人であったようです。学生自治会会議は学生の皆さんもずっと取り組んできた課題です。そして教育の世紀になった今、世界は教育を求めています。教育国連の発想がこれからますます重要な課題になると思います。

そして、次に「民衆と民衆の交流の中から平和と文化の架け橋を」という点をあげたいと思います。次のようにあります。「私立大学に学び、その自由潤達な精神を骨髓に刻み込み、独自の知恵を培った俊逸たちが、海を越え、大地を踏みしめて、この地球上のあらゆる民衆の真つただなかに入りゆくとき、初めて人間と人間、民族と民族、庶民と庶民の生命交流が可能となり、異なった文化の見事な融合と昇華が成し遂げられるものと、確信するからであります。そこから、民衆と民衆をつなぐ強固な交流の懸け橋が築かれ、陸続と続く友だちとともに、新たな地球文化、人類文化の胎動を告げる暁鐘が、やがて人々の心を揺り動かすにいたるであります。ともかく、諸君は民族間に架けられるべき平和と文化の橋を作り上げる使節であり、建設者であり、担い手であります」(p.95)。

このように真の平和と文化の架け橋は、私たちが民衆の真つただなかに入っていけるかどうかが大いなる点です。実は今日5期生のK君が来ていますが、彼は今、世界の創価同窓の友に登録制のサイトを開設し毎朝3年以上にわたって創立者の指導を送り続けています。もうサイトに登録した数は世界中で500人を超え、いたるところに創価同窓の友がまさに創立者の「遺言」を自分の使命としてはたとと羽ばたいています。おそらく潜在的には数千を超えると思います。すべて創立者との原点を携えて世界に羽ばたいています。皆さんの戦いの紹介を読むほどにすごい時代になったなど活力をもらっています。

次に「人間主義からの再編成」という点です。このようにあります。「諸君の使命は、あらゆる“力”を人間の幸福と平和のために使いこなす“知恵”を、身につけることにあるといいたいのであります。それは『汝自身』を知り、それに結びついた形で、学問を究めることでもあります。それが自分に、すなわち人間にとってどういう関係にあるか—すべてをここに引き戻して知識、技術、芸術の再編成をするとともに、新たな人類の蘇生を、もたらしていただいたのであります」(p.98)。どこまでも幸福と平和のための知恵を身につけ、そこから学問を究めていくこと、これも創価大学に与えられた課題であります。どこへ行っても何をやっても「人間」からの問い直しが必要であることです。自分自身を見つめない単なるアクセサリーとしての学問は必要ないということだと思えます。言葉は巧みでも人間の幸福と無縁の学問もたくさんあります。人間の幸せのためにある価値創造の学問、それこそ人間主義の学問なのだと思います。

そして、重要な点は次のようにあります。「在学中のみでなく、生涯、創価大学を皆の手で建設し、守っていただきたいというのが、私のお願いなのであります(拍手)」(p.92)。この大学建設こそ私たちの生涯のテーマとなっています。実は今回世界で活躍するメンバーにも感想をいただきました。その中で中国で活躍する4期生のYさんからコメントを紹介します。

改めて第4回入学式の創立者のスピーチを読み返しました。

創立者の我々に託されたその願いの大きさに、いまさらながら胸が熱くなります。入学式で感動した想いは忘れてはいません。世界への雄飛、創造的生命の開花を目指し、今なお悶え、奮闘しております。海外滞在期間も16、17年にも及び、世界への雄飛はできたものの、ただ単

に、滞在期間が長いだけになってはないかと反省させられます。社会的立場では海外拠点での責任者という立場にもなり、一応青年時代に抱いた所期の目的も達成し、今は何を指すべきか丁度想いをめぐらしていた時でした。安逸の日々にあぐらをかくのは好きではありません。また現在の社会状況ではそれは許されません。そんな折、創立者のスピーチを再読し、目指すべきところがまた見えてきました。自己の人間革命とその利他の絶えざる実践です。海外のどこにいても同じです。48才になりましたが、想いはまだ学生の気持ちそのものです。まだ老いてはいません。死ぬまで青年の気持ちでいるつもりです。創立者の願いを実現できるよう、自分なりに貢献していきたいと思います。この第4回入学式のスピーチは創立者が創大生に託された遺言ですので、後輩にも真剣に読み、取り組んでもらいたいと思います。

上海にて

このように創立者が「遺言」といわれ、私たちに使命の道を教えてくださいました。幸福のために使いこなす知恵を身につけ学問を究め、そして民衆の真つただなかに入り、世界の架け橋となって行くこと、創立者の打たれた点と点を線でつなぎ、立体としての平和像を作り上げること、そしてそれは生涯かけての課題であること、を述べられたのであります。これは私たちの永遠の挑戦目標であります。また多くの先輩たちもこの「遺言」を受け止め世界に雄飛しています。

そしてこの「遺言」を受け止めるならば私たちは創価大学をどういう大学にしなければならぬのか、そのそれこそ次の大学論・学生論・教育論であると思うのです。この3つの点は特に現役の皆さんによく思索をしていただきたいと思います。

4. 大学論——大学とは何か 私立大学の特質とは何か——

次に第2点目は「大学論」という視点であります。まず「大学の淵源」について次のようになります。「真理をこよなく自らのものにしたいという若者の熱誠がまずあって、それが学問的職業人、つまり教師を生み出し、そしてこの教師と学生との人間的共同体が、今日の大学の淵源になっていった。つまり、もともと大学というものは、学問を求め真理を愛する学生たちの熱誠から、始まったということなのであります」(p.91)。この点は、「創造的人間たれ」でも「スコラ哲学と現代文明」でも言及された点です。人間的共同体とは何か、学生から始まったことなど特によく思索してもらいたいと思います。

さらに「大学の存在理由」としてこうあります。「その一つに『教授も学生も大衆とともに歩み、人類の幸福と平和と英知という目標に到達するまでは、一切の困難を乗り越えるべきである』という言葉がありました。現代知識人の悪しき習慣は、この“困難”をいつも避けているところにあります。私は避けない。民衆の真つただ中であって、いかなる困難をも乗り越え、人類の崇高な目的に立ち向かっていく精神こそ、大学の存在理由であり、古くまた新しい使命であると、私は生命の底から叫びたいと思いますけれども、諸君どうだろうか(大拍手)」(p.90)。決して象牙の塔ではなく、民衆の中に入って、教授も学生も困難を避けずに人類の崇高な目的に立ち向かっていくことが大学の存在理由と言われています。

次に「私立大学の特質・使命」について、抜粋してみます。「私立大学の存在意義というものは、国家権力からの制約を受けることなく自主的に建学の信念を貫き通すところにあります。こうした大学の教育にあっては、広く人類の未来に思いをはせ、世界的視野に立つての有為な人材を、自由に伸びのびと育成することができるわけであります。狭い国家意識や、民族意識

のワクにとらわれることなく、世界の檜舞台に雄飛すべきスケールの大きな視野の広い青年たちを、荒れ狂う社会の変革のために送り出すところに、私立大学の特色の一つを、見いだしたのであります」(p.93)。さらに、「次に、あらゆる大学の使命の一つである学問の研究の場にあって、私立大学には学閥的閉鎖性のかげりがない。自由な、それでいて活力に満ちた気風がみなぎっていなければならないと思う。思想の自由、研究の自由、発表の自由、といった学問研究における絶対条件を満たしうるのも、私立大学に課せられた特色であると、私は考える。このような自らの信条に基づいて築き上げた学問の場こそ、独創的な研究成果を生み、個性豊かな研究者を育てていく母体となり、土壌となるにちがいない。また、泡沫のような時流にとらわれることなく、長大な展望に立っての息の長い研究に取り組めるのも、私立大学に課せられた役割であります」(pp.93-94)。そして、「大学精神を人類社会のなかに生き生きと通わせるには、私立大学こそが主流になるべきではないかと、主張しておきたいのであります。諸君、どうでありましょうか(大拍手)」(p.95)。この点はとくに大学論として私学の特徴・特質という角度からの展開です。国立官立に対して私学が主流になるべきだという点そしてその理由がここにあります。

次に、「大学は誰のためにあるのか」という点について確認しておきたいと思います。「同時に私は、未来の世界に響きわたるであろう地球新文化誕生を告げる暁鐘を、諸君の手で、打ち鳴らして行ってほしいのであります。そして、諸君の連打する暁鐘の音には、幾多の無名の人間庶民の切実な祈りにも似た願望が込められていることも、決して忘れないでいただきたい」(p.95)。とあります。

杉山さんも少し触れましたが、「大学は大学にいきたくてもいけなかった人のためにある」との言葉にあるように、多くの方々の真心から作られたのが創価大学であります。八王子のある壮年の方がかつて、創価大学開学の1年ぐらいい前に多くの方々と一緒にまだ何も無いこの山の上までわざわざ歩いてきて、暑い中で一生懸命草むしりをしたことがあるという話をしてくれました。手弁当で未来の人材がここから出るとの思いで汗を流したことが昨日のこのように、社会や地域で活躍する人材が続々と出てくる時代になったことが本当に嬉しいと語っていました。このような例をあげるまでもなく創価大学はまちがいなく多くの方々の真心で作られたのです。まさに「民衆立」の大学であること私たちは決して忘れてはならないと思います。

「大学論」としては、大学とはまず学生の真理を求める熱誠からはじまったこと、そこに教師との人間的共同体が形成されたこと、そして学生と教員が手を取り合って民衆のために困難に立ち向かっていく精神で私学の特質を生かし、自由で活力ある気風と独創性のある学問の場を築き上げることこそ大学の目的であることを主張しておきたいと思います。

5. 学生論——理想の学生像とは何か——

第3点目は「学生論」という視点です。まず「学生こそ大学の主役」という点をあげたいと思います。「本日もでたく入学された諸君に、心の底から要望したいことは諸君こそ私と同じく、若き大学の創立者であり、創造者であるという一点を、決して忘れないでほしい、ということなのであります。在学中のみでなく、生涯、創価大学を皆の手で建設し、守っていただきたいというのが、私のお願いなのであります(拍手)」(p.92)。「諸君たちは大学から与えられるのを待っている、という姿勢ではなく、能動的に、かつ情熱的に“これこそ、大学の新しい希望の灯である”といえる、誇りに満ちた勇気ある建設作業に、取り組んでもらいたい」(p.92)と学生こそ若き創立者であってほしいと心の底からの期待を寄せられます。当時、私たちが考え

たものは「創立者としての学生」ってなんだろうということでした。たしか第2回滝山祭のテーマだったと思いますが、「創立者とともに創立者の精神で」とありました。どこまでも学生が主役と見守ってくださる池田先生。そして学生が創立者とまでいって下さった思い、その思いに応えようと、さまざまな課題に皆で積極的に取り組みました。その中の1つに学費問題があります。

本来学費の値上げを決定するのは理事会の役割です。しかし、私たち入学のときにはすでに先輩たちは自分たちの問題として学費問題を検討していました。まさに創立者の自覚で学費問題に取り組み、3年間皆で学費問題を徹底して議論しました。そして検討を経て、「後に続く後輩たちのために、やむにやまれぬ思いであるが、将来の創価大学の存続を考えるとやむをえない。」と決断して学生の手で学費値上げを決定しました。しかし、その過程で皆も悩み抜き「その分私たちが必ず立派な人材になり、社会にそして母校に貢献していくことを誓いあおう」と、とことんまで話し合いを重ねました。この学費を上げる決議を学生が自分たちの手で母校を支えるために行ったことは、当時社会でも注目を浴びた快挙でした。

また次に、「知恵と知識」という点を考えてみたいと思います。このようにあります。『知識』や『学問』そのものには、善悪はありません。皆さんはこの最高学府において4年間、優れた学問を研鑽した結果、社会へ出ていってから極めて巧妙なる知能犯にもなれるし、秀でた有益なるインテリゲンチアにもなれるのであります。いずれになるかは、皆さん方各人の自由意思の発動しだいであります。ですから、この4年間、願わくは全員、良心に基づいた学究生活を送られんことを、切にお祈り申し上げるものであります」(p.87)。「力」の追求のために道具とされた教育が、本来、教育の生命である個々の人間の尊重、人間の尊厳の樹立という一点を失って、国家や企業にとって価値のある人間、すなわち国家、企業という組織の中の歯車のような部品に甘んずる人間をつくりだしてきた。教育がその手段となってきたということも、忘れてはならない重大な問題であります。「力」の追求も大事だが、それは同時に“力”を使いこなせるだけの“知恵”の開発を伴わなければならない。“知恵”とは、人間自体に根ざしたものであり、ソクラテスがいみじくも喝破したごとく『汝自身を知る』ことから発するのであります。ここにこそ、人間を機械の部品に墮落させない、人間を他のいかなる物とも交換し得ないものとする、尊厳性樹立の起点があるわけであります」(p.97)。「真実の学問とは、詮ずるところ、この自己への“知”にある。創価大学が目指す学問、教育の理想も、ここにあるといつてよい。「力」への学問においては、優れた大学や研究機関が世界に数えきれないほどあるであります。だが、それらは人間に何をもたらしたか。それは、惨憺たる現代文明の虚像ではなかったかとも、みえるのであります」(p.98)。

何のための学問なのか、私たちは知識をうるためだけの大学に通っているのではないのです。力のための学問ではなく、知恵を開発し、その上に立って、良心に基づいた学問を究めようという姿勢で臨まなくてはならないと思います。それが、創立者としての学生の姿勢だと思ふのです。どこまでも能動的にかつ情熱的にこれこそ大学の新しい希望の灯火であるとの誇りに燃えていくことが大切なのです。

私たちの学生時代をふりかえるとそれこそ何もありませんでした。施設としても大学には何もありませんでした。今30年たって正門ができ、図書館、教育学部棟、短大、工学部ができ、そして池田講堂、大学院生の時習館、そしてこの学生ホール、さらに本部棟など歴史を見てきた一人としても夢のような発展です。当時は建物も道路も、何もありませんでした。周りに食事をするところもほとんどありませんでした。「この丹木の山を降りて、町に買い物に行こう」

と皆で掛け声をかけるほどでした。しかし、そこに燃えていたものは創立者の期待に応えようとのざらざらと燃え上がるような「創立者としての学生」の情熱だけでした。

どうぞ皆さんも良心に基づいた大学生活を送り、若き創立者の自覚ですばらしい学生時代を送ってください。

6. 教育論——教員と学生のあり方とは何か——

4点目は「教育論」という視点です。まず「教授と学生の関係」についてこうあります。「私がサンマルコス大学を訪問したさい、総長との会談の席に同席した20数人の教授の方々から、各人のモットーを贈られました。この教授の方々のすべては、ペルーにおいては第一級の教授とうけたまわっております。その一つに『教授も学生も大衆とともに歩み、人類の幸福と平和と英知という目標に到達するまでは、一切の困難を乗り越えるべきである』という言葉がありました。(中略)我が創価大学をはじめ、世界の各大学が、そしてすべての教師と学生が大衆とともにこの共同作業に取り組むならば、必ずや人類平和の目標に達せられるにちがいない」

(p.90)。さらに「教授と学生の断絶の問題」「世界中の大学の課題」について次のようにあります。「教授と学生の断絶の問題について、サンマルコス大学の副総長と話し合ってください、副総長は、次の2点を述べておりました。その一つは、対話が絶えず行なわれなければならないこと、第2点として、学生が責任をもって大学諸行事に参画できうる体制を講ずべきである、というのであります」(p.92)。そして学内における「対話の重要性」をもっとも強調されます。このようにあります。「対話という問題であります、価値ある対話というものは、それぞれの責任感と、信頼感から生まれるものであって、無責任な討論ではないのであります。すなわち、自分たちの大学であるとの強い自覚に基づく責任と創価大学を人類文化の跳躍台としていくのである、という目的観に結ばれた相互の信頼関係が、必ずや実りある対話をもたらすことでありましょう。そして、本大学に見事な人間的共同体を創出していただきたいと思います、私は強くお願いするものであります」(p.93)。

2002年の入学式で創立者は次のようにいわれています。「大学は学生で決まります。と同時にこれからは教員の熱意と学生を思う人格で決まるでしょう。「学生も教員も同じく建学の精神に集った同志としてお互いに切磋琢磨していく。これこそ『人間教育』の真髄であると思うのであります」。そして「教員革命」こそ今もっとも重要なテーマであると言われています。もちろん私たち教員自身が変革の努力をすることが大前提です。しかし、そのために大事なことは「対話」という視点だと思えます。対話とは単なる会話とは違います。私なりに対話という点から人間教育の3条件をあげるならば、1. 対話が行われる場があること、2. 対話に参加していること、3. 対話しようという雰囲気があること、と考えています。

このことについて卒業後、韓国に渡り苦勞しながらも現在大学で教鞭をとっているKさんからコメントをいただいています。

私は在日韓国人で創大の8期生です。現在は韓国の大学に勤務しています。教壇に立つものとして創立者の講演は大変興味深く聞かさせていただきました。特に「教員と学生のあり方」における「教授と学生の断絶の問題」は韓国でも大きな問題となっています。韓国では儒教の影響のためか、目上の人にたいしての礼儀を重んずる文化を持っています。たとえば、目上の人の前ではたばこを吸いません。父親でも例外ではありません。お酒を飲む時も杯を受ける時は、杯を持っている手にあいた手を添えながら横をむいてお酒を飲まなければなりません。ま

た、男子学生は徴兵がありますので、軍隊の勤務を終えて帰ってくると先輩後輩のけじめはよりはっきりと現れるようになります。このようなことが起因してか、学生が教師にたいして距離を置いてしまう傾向にあります。反対に教師も学生との距離を置くことを望む傾向が強くなってしまいます。

以前、4年生の学生とお昼ご飯をいっしょに食べる機会があったのですが、その折にその学生が「大学生活の中で教授とこのように食事をしながら話をしたのは初めてです」と言ったのを聞いて、私の学生に対する無責任さを痛感した覚えがあります。私も知らず知らずのうちに対人間として学生と接するというより、学問の上下関係で学生と接してしまっているようです。やはり、そこには創立者が言われている『教授も学生も大衆とともに歩み、人類の幸福と平和と英知という目標に到達するまでは、一切の困難を乗り越えるべきである』という根本的な目標を見失っているからだだと思います。この点、私には大きく反省させられるものとなりました。根本的な目標を忘れ、ただ単に学術的なつながりによる学生と教師の関係には人間らしい本来のつながりは作ることができません。自ずと自分びいきの学生だけが周囲に集まるという偏った関係に陥ってしまいます。創立者が強調された責任感と信頼感から生まれる「価値ある対話」は生まれてきません。創立者のこの講演を何度も読み返しながら、もう一度創価大学時代に培った原点と言うべきものを再確認しながら、現実の職場の中で創立者のこの思想をどう現実化させていくか、戦って参りたいと思います。

教員と学生が高い目的観にたつて、責任ある態度でかつ信頼の絆を深めながら相互に対話を重ねていくことが人間教育の真髄だと思います。私たちも学生時代から同じ気持ちで取り組んできました。また、杉山さんの話にもありましたが、当時の教員は今考えると残念ながら雇われ教員の意識の方もおり、創立者の理想へ賛同して集ってきたとは聞いていましたが、燃えるような情熱を感じさせる教員は決して多くはありませんでした（もちろんその中でもいままでも理想を貫いてこられた先輩がたも少なからずいらっしゃいます）。今30年たち、創価同窓の教員はやっと75名を数えることになりました。創立者からの期待も大きく、建学の理念を何とか実現できる人にと日々がんばっています。創立者の構想にかなう大学に全ての教員と語りながら、みんなで団結して建設してまいりたいと思います。

人間教育の最高学府たれとの建学の指針は、ここでは学生論・教育論の中に展開されていると思います。そしていよいよ結論です。

7. 人間論から生命論へ ——創造的人間の源泉とは何か 使命を果たしゆく源泉をどこに求めるか——

そして、いよいよ結論にたどり着くのですが、冒頭に述べたように この講演には今まで見てきたように、これから1000年2000年と続いていく創価の運動の精神的・理論的機軸となるであろう創価大学の根本的な理念と理想が貫かれています。そして最初の意義でも述べたように、結論として創価の運動の機軸には創造的生命的開花—ヒューマン・レボリューションこそがすべての源泉であることを主張されたものであります。壮大な歴史の流れの中で、創価の運動が将来必ず世界から評価され、(創立者一人の努力ですでに現在評価されつつあります) 一大世界平和運動の原点は一人の人間における人間革命運動—個人を最高に輝かせ、周りにもその価値を最高に高めていく運動から始まった、また今後もそこにしか基軸はないということが大学の建学の精神の上でも永遠の目標として宣言されたことに大いなる意義があると捉えています。

まず、創立者の言葉をそのまま皆さんで声に出して読んで見たいと思います。私にとってもこの部分は何回も何回も夢にまで出てきた言葉です。まさに創立者の命の実感から発せられた永遠の指針とでもいう部分です。

私の胸にあふれてやまぬ“創造”という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けた時の自己拡大の生命の勝ちどきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません。“創造的生命的”とは、そうした人生行動のたゆみなき練磨のなかに浮かび上がる、生命のダイナミズムであろうかと、思うのであります。

そこには嵐もあろう、雨も強かろう、一時的な敗北の姿もあるかもしれない。しかし“創造的生命的”は、それで敗退し去ることは決してない。やがて己れの胸中に懸かるであろう、さわやかな虹を知っているからであります。甘えや安逸には創造はありえない。

愚痴や逃避は懦弱な一念の反映であり、生命本然の創造の方向を腐食させてしまうだけあります。創造の戦いを断念した生命の落ち行く先は、万物の“生”を破壊し尽くす奈落の底にほかなりません。

諸君は、断じて新たなる“生”を建設する行為を、一瞬だにもとどめてはならない。創造はきしむような重い生命の扉を開く、最も峻烈なる戦いそのものであり、最も至難な作業であるかもしれない。極言すれば、宇宙の神秘的な扉を開くよりも「汝自身の生命の門戸」を開くことのほうが、より困難な作業、活動であります。

しかし、そこに人間としての証がある。否、生あるものとしての真実の生きがいがあり、生き方がある。“生”を創造する歓喜を知らぬ人生ほど、寂しくはかないものはない。生物学的に直立し、理性と知性を発現し得たことのみが、人間であることの証明にはならない。創造的生命的こそ、人間の人間たるゆえんであると思えますけれども、諸君どうだろうか（大拍手）。

新たなる“生”を創り出す激闘のなかにこそ、初めて理性を導く輝ける英知も、宇宙まで貫き通す直観智の光も、襲いくる邪悪に挑戦する強靱な正義と意志力も、悩める者の痛みを引き受ける限りない心情も、そして宇宙本源の生命から湧き出す慈愛のエネルギーと融和して人々の生命を歓喜のリズムに染めなしつつ、脈打ってやまないものがあるからであります。

逆境への挑戦を通して開かれたありとあらゆる生命の宝をみがき抜くにつれて、人間は初めて真の人間至高の道を歩み行くことができると、私は確信するのであります。故に、現代から未来にかけて“創造的生命的”の持ち主こそが、歴史の流れの先端に立つことは疑いないと、私は思う。

この“創造的生命的”の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち“人間革命”と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります（pp. 100-101）。

素晴らしい輝きの言葉です。創立者自身のそれまでの人生がどんな思いに彩られ、「創造的生命的の開花」に挑戦してこられたか、こんな表現ができる人は創立者以外にはありません。私自身も順調に來たわけではありません。大学院に行って母校の教員を目指しますが、母を亡くし悔しい思いをしながら、活動に勉強にアルバイトに全力投球、もうだめだと思うときも、生きる意味さえわからなくなるときもありました。しかし、苦しいときこの言葉が頭をよぎります。果たして自己の全存在をかけているのか、悔いなき仕事をつづけているのか、さらに必ずや自己を拡大できたとの勝ちどきをあげてみせる、そして汗をかき涙を流すような思いで取り組んでいこうなど、創造的生命的こそ人間の証との思いでそのたびに自分を叱咤してきました。そ

してそのたびに歓喜とさわやかな虹を何回経験したことでしょうか。この一節はもちろん私だけでなく、多くの創大生が苦しいときによりどころとしてがんばりぬいてきた原点でもあります。

創立者のこの表現をまとめることはできませんが、いくつかポイントを整理してみます。

まず①創造的生命とはどんな人であっても、万人の中に存在するという事です。これは「生命本然の創造の方向」という言葉に含まれる点です。つまり皆がもともと持っているものであることを述べられています。次に、②そしてそれは激闘の中に発現されるものであるということです。「全存在をかけて」「悔いなき仕事」「汗と涙の結晶作業」「弛みなき練磨」という言葉にあらわされるのでしょうか。そしてその結果「英知も直観智の光も」「正義と意志力も」「他者への慈愛の心情など」を自然に脈打たせることができるとあります。

そして③ものすごい歓喜を伴うものであるという点です。「自己拡大の勝どき」「さわやかな虹」「生を創造する歓喜」という言葉でしょうか。歓喜の中の大歓喜ともいえます。そして④さらに残念ながら一時的には敗北の陰を引きずることもあるということです。命の厳しさともいえます。「嵐、雨」「一時的な敗北の姿」とあります。そしてキーワードは「甘え」、「安逸」「愚痴や逃避」。本当に厳しい言葉です。「創造の戦いを断念すれば 生を破壊しつくす奈落の底に落ちていく」とも「もっとも峻烈な戦い」とも「もっとも至難な作業である」ともいわれています。⑤しかし、敗退し去ることはない。なぜなら胸中にかかるさわやかな虹を知っているからです。そしてそれこそが「人間としての証、生あるものとしての真実の生きがい」であり、「人間であることの証明」であります。そして「創造的生命こそ、人間の人間たるゆえんである」と言われています。また、「人間至高の道」という表現もあります。これ以上至ることのない人間の道という意味です。しかし、理性と知性を発現しただけではだめなこと、つまり知識人と言われる人でもだめなのです。そして「逆境への挑戦から開かれるもの」であり、待ってはいけません。挑戦することが重要なのです。

また、⑥今日だけでなく生涯かけての課題であるということです。これは言葉を変えれば一瞬であり永遠であるともいえます。日々一瞬一瞬、生命を磨きぬいていく中に創造的生命が鍛えられ、そしてやがて満開に咲き誇り、自己の人間革命へとつながっていくことを意味します。まさにこれは創立者の生き方の中で、命の実感を語られた点です。

そして、⑦最後にさらに他をも触発するということをあげたいと思います。先日ワイルド・スミスさんの話をききました。童話作家として世界的に有名なスミスさんがスランプに陥ったときに池田先生との交流を通して、創立者の創造的生命に触発され、スランプを乗り越え作風がさらにすばらしく変わったということ、また、香港と母といわれた方召磨画伯も同じであったと聞きました。まさに創造的生命は周りを触発し、変革の力となるのです。私たち一人の人間における創造的生命の開花は自分だけでなく、周りの生命を触発し、歓喜と感動で自分自身の生命をさらに飾っていく、この創造的生命の開花こそ私たちの創価の運動のすべての機軸であるといえます。

この結論部分とはくどくど何回も繰り返し読んで刻み付けていく事が大切だと思います。

最後にありがたいことに私自身、草創期の苦勞をこの言葉とともに乗り越えて、短大の創立とともに教員として教鞭をとらせていただき、短大の草創期から18年間まさに学生たちと泥まみれになるような思いで短大建設に携わらせていただきました。今日は短大生もたくさんきていますので一言紹介しますが、創立者より理想、鍛え、教養という3つの指針をいただきスタ

ートし、「2年間で4年制以上の実力」を目標に頑張る短大生の女性の世界は、とくにまさに毎日が激しい創造的生命的磨きあい、打ち合いであるといえます。とくに男子学生の皆さんには秘密の世界のようで興味のある部分でしょうか（笑い）。しかし、彼女たちもおそらく逃げ出したくなるときもあるでしょうし、いろいろとあったとも思います。しかし、生命と生命の触発はすばらしいものをもたらします。あれだけの濃い密度の中でしっかりお互いに打ち合い、磨きあいながら、2年間立ったときの彼女たちの成長には本当に目を見張るものがあります。まさに、創造的生命的を基盤として学問に励むとき、人はこれほど成長できるのかと感動の18年を送ってきました。これからは女性の時代と言われる意味が少しでもわかる気がします。短大生の皆さんありがとうございます。

今回、私にとっても原点ともいえる創立者のスピーチを読むとのテーマで講演をすることができ、改めて自分自身を見つめることができたことに心から感謝しています。何回も何回も読み直すたびに、自分のゆがみを矯正してくれるのがこの講演であります。これからも生涯この指針を自己に問い続けて世界一の創価大学・創価女子短期大学を作る創造者・創立者として生き抜いていきたいと決意しています。ご静聴大変にありがとうございました。

（本稿は、2003年6月20日の講演を加筆・訂正したものです。傍線は筆者。なお、創立者講演からの引用文のページは、創価大学学生自治会編『創立者の語らいⅠ』1995年によっています。）